

の多くの伝記類が示唆しているが、その真因をとらえることは今後とも容易ではないであろう。ここで Max Wylie は彼独自の極めて明快な観点からこの作家の個性形成の秘密を提示しているのである。だがこうして生まれた Seton Farrier は Eugene O'Neill の外貌を持ちながら、実は別人というほかない。作者は自ら創造したこの人物を解剖し究明し、白日の下にその正体を曝そうとする。本書は、彼の一貫したその努力の集積である。Seton はこうして、救いがたい、自我中心の“Monster”として宜明され、また彼にかしづいた妻 Jill は最後に完全な絶望に崩折れる。

作者は Seton Farrier の観察を通じて次のような結論を提示していることが認められる。

- ① 芸術家の内にある欠陥や弱点そのものが芸術を創造させる力としてはたらいっていること。

② 天才は自分より劣った正常な人々の奉仕と犠牲の上に立ってその偉大な才能を發揮できること。この考察は O'Neill についての伝記的事実や観察と興味ある一致を見せる。とりわけ Agnes Boulton が *Part of A Long Story* (前掲) で回想している彼との10年間の生活がこれを如実に示唆しているといえよう。

Eugene O'Neill の、異様ではあるが丹精込めた一種の“肖像画”としてこの作品は、彼についての老大な作品研究や伝記類の外縁にその独特な地位を占めるものといえるであろう。*Trouble in the Flesh* は大方の批評家によって認められているように、小説としてそれ自体異常な迫力をもって読者を素きつけるが、特に O'Neill の研究者にとって甚だ興味ある示唆を含んだ作品である。(同志社大学工学部専任講師)

Occasions and Protest.

By John Dos Passos. Chicago: Henry Regnery Company, 1964.

千 葉 哲 郎

この本は1936年から1964年にわたる約30年間に発表された文章を集めたものである。

I. Certain Fundamentals, II. The Leaders and the Led, III. That Something More than Common の三部からなり24の論文や随想がおさまられている。第I部では、Dos Passos の作家としての面目、自由の必要、芸術家としての自己の形成の背景、Jefferson 式自由人の尊厳を護るための現実批判、などが論じられ、いずれも著者の創作の秘密にふれるものばかりである。第II部は、題目の通り指導する者と指導される者間の問題点の追求であり、要職にある人物との面談を通して得られたことを小説風の書き方で示している。第I部と第III部で論じられる内容の、生きた人物を通じた実証的政治・社会分析と批判、といえよう。第III部は、第I部の論調に通じるもので、正しい現実認識の必要と、現代の産業社会に君臨する官僚主義的権力に抑圧された個人の自由の擁護を激しく説いている。

はじめから一冊の本にするように書かれたのではないので、中には編集上かなり無理な組み合わせがなされている文もある。ソビエト連邦の不自由、イギリスの不自由と並んでアメリカの不自由を強く批判した著

者の中にも、今日のアメリカに対する誇りと建国当初のアメリカ人の個人の自由への意志が共存していることを、編集者は、この本の冒頭を愛国的な‘The American Cause’で飾り、結尾を‘Lincoln and His Almost Chosen People’でしめくくことで示している。Dos Passos は、人間を愛し、アメリカを愛するが故に、建国当初のアメリカ精神をふみにじる如何なる政治社会の権力をも憎んだのである。アメリカの南部を憎みかつ愛した William Faulkner と極めて良い対照をなすものといえよう。同時代のアメリカの巨匠であるこの二人の作家は、一方が政治的情熟を注いで現実の悪条件をはぎ取ろうとした行動派であるのに対し、他方は静観の中に人間の罪悪の根源をみたといい相違をふまえながら、究極的には無垢と素朴を愛するアメリカ人であるという共通点をもつことがうかがえる。逆にいえば、二人共、文明憎悪のアメリカ人であったといえる。ここで浮かび上がってくるのが、第I部の三番目に置かれた‘The Harvard Afterglow’である。これは著者の Harvard 在学中の恩師の思い出話である。在学中、Dos Passos は Dean Briggs の古めかしさが鼻もぢならないものであると感じていたが、卒業後20年して“古めかしい紳士の道徳的清純

さへの関心”をもつこの老師の偉大な価値がわかった。この老師夫妻は ‘a fresh rustic look’ をもっていて、それが著者を喜ばせた。“Provincial” や “old-fashioned” という言葉は今や優しい響きをもつ言葉となった。夫妻は “the innocence of new born lambs” をもっており、Dos Passos は、できることなら、この自分より若々しい70才の老師と入れ代りたいとさえ感じているのである。読者は、人間の尊厳と自由の擁護のための闘士、Dos Passos, の赤裸々な心の奥底にふれる思いがするであろう。

さて、第I部から順を追ってこの本の中心をなす問題点を検討してみよう。第I部の ‘The Workman and His Tools’ は *Three Soldiers* (1921) を書いてから13年たってからの回顧で、1919年の記憶にはじまっている。創作目的が具体化したのはこの頃なのであろう。

The mind of a generation is its speech. A writer makes aspects of that speech permanent by putting them in print. He whittles at the words and phrases of today and makes forms for the minds of later generations. That's history. A writer who writes straight is an architect of history. (p. 8) と語るあたり著者の作風をよく示している。さらに今日の作家の任務を At this particular moment in history, when machines and institutions have so outgrown the ability of the mind to dominate them, we need bold and original thought more than ever. It is the business of writers to supply that thought, and not to make of themselves figureheads in political conflicts. (p. 11) と語る。このようにして、作家は人間の味方、自由の味方として、あらゆる政治機構、官僚主義と闘う危険で不愉快な最前線に立たざるを得ないのである。十字火にさらされ、友人たちにも、いつなんどき敵として足をさらわれるかも知れない。つまり、‘A writer writes not to be saved but to be damned.’ (p. 13) というわけだ。ここにおいて作家に、真実を追求するための自由が望まれる。この自由は一般市民の生存の自由に直結するものである。Dos Passos は第一級の作家の使命を次のように述べている。All writing which is in any way first rate is an effort to tell the truth. Good writing is useful to society because each first rate piece of work adds a little something new to truth. The old truths don't need retelling; first rate writing must

always add something to man's knowledge of himself, of man's behavior when he runs in packs, of the world around him. (p. 14)

From Homer and Confucius to our own day the first rate writers have managed to light, in a thousand different styles and languages, varying fragments of that basic knowledge of man's hopes and fears, of his strengths and weaknesses, which we have a right to call truth. (p. 15)

この真実こそ官僚主義者、独裁者たちが最も嫌うものなのである。なぜなら、彼等はうその煙に人民大衆を巻き込んで人民を搾取し、自分の独善を果たそうとするからなのだ。個人の尊厳と自由を護ろうとする Dos Passos の立場が官僚主義者、独裁者とぶつかり合うのはまさにこの点においてである。“A Question of Elbow Room” の終りで、William Harvey が、体の透明なえびの心臓の動きを体外から観察することができたという文の一節を引用して、「我々は Harvey がえびの心臓をみるることができたのと同じくらい明確に社会の形状をみつめなければならない。」と語っているが、この「みつめる」ということが、戦争体験とあいまって Dos Passos に占める比重は決定的である。すでに述べた真実の追求がその場合であるが、彼の小説の描き方が多分に近代絵画の影響に満ちていることも、その「みつめる」ことからきているようである。“Satire as a Way of Seeing” でまず「みること」の分析をし、過去50年間のアメリカ人の視覚上の習慣が変わったこと、“wordminded people” が “eye-minded people” になりつつあること、アメリカ人の絵画に対する関心が高まったこと、自分もその例外でなく、Goyas, Grecos や Giotto の絵を観、特に Grosz の絵に影響されたことをくわしく述べている。そして Grosz の絵の中に Dos Passos は futurism と cubism の影響をみ、satirist と moralist の両面をみた。Grosz の satire が痛ましいものであることもみた。Grosz の絵の表現するものは outraged humanity であった。Dos Passos は Grosz の絵から、老人ども、太った男どもがどのようにみえるかを知り、また彼等のどん欲さを知った。絵には人間たちが身の毛もよだつような姿で描かれていて、それをみていると憎しみから解放されるのを Dos Passos は知らされた。Grosz は20代に第一次大戦の衝撃下におかれ、ヨーロッパ社会構造の緊張度が最高に達した時に育ったドイツの青年であった。大戦を体験した Dos Passos が Grosz

の絵の中にある *sordid and pitiful object* に共鳴したのもうなずけることである。Dos Passos の小説の手法と考えあわせると興味がある。このように、「みつめる」ことが、政治、社会機構や人間そのものをみつめる心を磨き、新しい小説の表現手法を生み出す動因となったと考えることができよう。

Dos Passos が今日のアメリカをローマ帝国衰亡史に照らし合わせてみていることは周知の通りであるが、また同時に、Jefferson 時代の理想像と比べていることも事実である。“The Use of the Past”においては、「歴史は今日の社会を映しだす世界像の基本になるのであり、変遷した歴史の中でどのように“自治”を進めていったら良いかに答えてくれる」と論じ、「もし、我々が今日目標としていることが、あらゆる人の幸福と尊厳を増大させることであるなら、アメリカ建国者の求めたものと同じであって、今日の機械は変わったが、それを操作する人間はあまり変わっていない」として、Jefferson の自由人の尊厳に対する感覚をもちだしている。“A Question of Elbow Room”で示しているように、Dos Passos にとってはそういう Jefferson 時代の自由人の尊厳を、今日の産業社会においてどのように生かすことができるか、が関心事なのである。今日のような、個人の自由な活動を許さない官僚組織社会においては、内部に破滅の危機をはらむのであって、このことを、「ローマ帝国は外部からの侵入で滅びたが、今日の危機は内部の制度の中にある」として、産業社会における個人の自由な活動の余裕をつくるよう警告している。このことは第Ⅲ部の“Cogitations in a Roman Theatre”でもくり返される。ここでは、文明の諸目的に奉仕するように現代の産業社会の諸制度を適応させる方法をみいだすことが大切だ、と指摘している。

第Ⅱ部の“The Education of Leviathan, 1943-45”では5つのエッセイからなっているが、その中の *Only a handful of men* は、White House に Roosevelt 大統領の officer の Harry Hopkins を訪ねた時の模様が語られ、戦争が如何に少数者の手にかかって起こされるものであるか、が語られている。その少数者の *Only a handful of men* がこの小品の題となった。“An Old-fashioned Progressive”は New York 市長にみる機械化された人間の追求と、市長自身が求める静かな憩いとの皮肉な対比図である。“Labour at the Grassroots”では、ポーカー・ゲームのように扱えない *labour management relations* の問題が描

かれているが、ここにも機械としてではなく、自由人としての個人を尊重する著者の態度がにじみでている。“Science Under Siege”は Dr. Oppenheimer 訪問記である。博士は、今日の社会では日毎に総合から遠ざかりつつあり、学生はますます細分化された専門領域に閉じ込められて他の領域への関心を失っていると、これに対し Jefferson はあらゆる知識を自分の領域とした、と現代の欠陥を指摘する。Dos Passos は、博士が音楽やソビエト連邦の変貌や、T. S. Eliot をたのしげに語る様子の中に *deadening stereotypes* が何等認められないことにその人の大きさを感じているようである。“American Modern”は国連ビルの建築計画の草案をたてた Mr. Harrison 訪問記である。氏は“Architecture is determined by human beings. It is shaped by what people need to do.”と語り、国連ビルが Le Corbusier をはじめとする多くの人々がそれぞれの個性と技術を発揮しながら、外景をうまくとり入れてできたものであることを示す。Dos Passos はそこに秩序と美を見いだし、アメリカの最大の力、変化に対するアメリカの能力の反映を認めて *American Modern* と評する。

第Ⅲ部に入ると、第Ⅱ部の軽い筆致から、再び固い論調に移る。まず、“The Changing Shape of Institution”では社会を改良するための第一歩は“to form for ourselves an accurate picture of the society we live in”であるとしている。事実を知らずに批評する Edmund Wilson の無責任を追求して知識人の責任を論じた“A Protest Protested: Please Mr. Rip Van Winkle Wake Up Some More.”にも共通する問題点である。“A Letter to an Editor”でも、ロシア、アメリカ両国民がたがいの生活の真実をかくし合うのは良くないことで、国民同志が友人となるためには realities を理解し合わなければならない、と論じている。“The Changing Shape of Institution”では更に、個人が自由に参加できるような社会の必要を説き、今日の政治機構が、経済、社会構造に合致していないことを批判する。アメリカが建国されたのは、政治家のための *glamorous office* を与え、商品を作るためではなく、自由人を産むためだったと語る言葉には、失いかけた自由への渴望とあがきがある。

“England under a Labor Government: 1949”では、英国のような高度に洗練された文明国でさえも、複雑な福祉国家の機構の中で、個人が自由に振舞える余裕がほとんどない危機状態にある、と論難してい

る。“Anonymously Yours”では労働者からの投書にもとづく例を多くあげながら、共産主義制度の本質は少数独裁政治による労働者の搾取であって、同様の制度がアメリカを支配しつつある、と警告している。このような状勢の中で、権力者に対して、個人の自由を護るために、支配者ではなく召使になるよう求め、“England under a Labor Government: 1947”を次のように結ぶ。“We are more and more governed, instead of by the old-fashioned politicians, by people who are adept at institutional manipulation.

.....
 When we like our new rulers we call them public servants. When we are mad at them we call them bureaucrats, but it is the business of self-government to see that they remain servants of the public instead of becoming its masters.” (p. 242)

この理想論は本書の結尾文、“Lincoln and His Almost Chosen People”において、Lincolnの“government of the people, by the people and for the

people”という名句におきかえられる。今日“the people”の言葉の概念はもはやLincoln時代のそれではなくなっているが、上の名句は、指導する者と指導される者のbalanced interplayを示すものであり、この原理に従って自治の方法と個人生活の充足をvariety行く大量生産制度に順応させて行くべきである、としている。

本書は全体としては内容に重複がかなりあり、論調のバランスもややちぐはぐに傾くところもあるが、史実も豊富で、くわしい具体的事実にもとずいてさりげなく人類の直面する重大問題を論じる力量は大きい。Dos Passosはきわめて理想主義的であり、あくことなく現実の真相をあばいて人間を護ろうとする情熱漢である。本書は警世の作家の論議であり、固い文章ではあるが、Dos Passosの小説の読者はもとより、現代の社会に人間として生きようと望む人々の座右の友となるだろうし、冷酷な官僚的権力者にあたるすべての人々には反省の書となるだろう。

(同志社大学文学部専任講師)

☆現代のアメリカ文化像	R. E. スピラー他編 同志社大学アメリカ研究所訳
☆ニューディールの経済政策	弘文堂刊 アメリカ経済研究会編
著者 古米 淑 郎 榊 原 胖 夫 渡 辺 弘	
岩 根 達 雄 野 間 俊 威 西 川 宏	
小 松 幸 雄 田 口 芳 弘 柏 博	
今 西 正 雄 笹 田 友 三 郎 小 野 高 治	
松 井 七 郎	慶 応 通 信 刊
☆英米におけるピューリタンの伝統	アラン・シンプソン著 大下尚一・秋山 健 共訳 未 来 社 刊